

[研究ノート]

ソ連崩壊後の文学 ——詩の朗読会の歴史

鴻野わか菜

1. 論の目的

本稿は、帝政時代から続くロシアの伝統的な文化形態である「詩の朗読会」に焦点を当て、その近年の変化（とりわけ 1980 年代末のペレストロイカ期から現在まで）をたどることで、現代ロシア文学の状況の一端を明らかにしようとする試みである。

詩と詩人は、ロシアの社会と文学史において、つねに大きな位置を占めてきた。文学に社会論的・道徳的なメッセージを期待して、詩人や作家に「教師」や「人間の魂の技師」としての役割を求めてきた伝統的な文化体系（文学中心主義）のもとで、詩人は、あらゆる時代——19 世紀初頭のプーシキンを中心とする「金の時代」、1920 年代のアヴァンギャルド期、地下出版で詩が読み継がれたブレジネフ期など——を通じて、「国民詩人」、「革命詩人」、「反体制文化のシンボル」として社会や人々に影響を与えてきた。

それに際して、重要な場となったのが朗読会である。朗読会の研究は、従来決して充分になされてきたとはいえないが、多くの詩人が、文学会、サロン、自宅、知人の家などで詩を朗読し、聴衆はそれを聞くことで作品や詩人への理解を深めてきた歴史に、あらためて目を向ける必要がある。¹

詩の朗読会の目的の一つは、聴衆が、詩人の声、抑揚、パフォーマンスを、コンサートのように愉しむことである。ロシアにおいて、詩は、「(過去に) 書かれた言葉」(=独立したテキスト)であると同時に、「(未来に) 語られる言葉」であり、朗読によってその都度新たに生まれ変わる時間芸術である。その点で、詩は、音楽にかぎりなく近いと言って良いだろう。

さらに、朗読会が、詩人による挑発的な啓蒙の場、社会や政治に対する挑戦の場（ロシア・アヴァンギャルド、オペリウ）として、また、詩人と聴衆が意識を共有し、共に社会の変革を求める場（雪解け期）として、ロシアの文化史上で様々な役割を果たしてきたこ

¹ 朗読会の研究の必要性については、以下の文献を参照。Кузьмин Д. Литературная жизнь: клубы и салоны // Арион. 1998. № 1. С. 98-106. また、ロシアの朗読会の近年の研究書としては、Бранг П. Звучащее слово: заметки по теории и истории декламационного искусства в России. М., 2010 等がある。

ともにも注目する必要がある。詩人と聴衆の直接的な接点である朗読会は、それぞれの時代における文学と社会の関係を体現しているといっても過言ではない。それゆえに、ソ連期から現在に至る朗読会の形式の変化をたどることは、詩人の役割、文学の受容の変化を照射することに他ならず、きわめて重要であるといえる。詩の朗読会の歴史は、文学の発信力、文学の公共性の問題も提示している。

こうした問題を踏まえて、本稿では、ペレストロイカ期から現在までの朗読会の変化という観点から、ソ連崩壊後の文学の状況を考察したいと思う。90年代以降には、地方都市においても文学のフェスティバルや朗読会が活性化したが、それについては別稿に譲ることとし、本稿では、社会の変化と連動していち早く新たな文学運動が始まったモスクワの事例に焦点を当てる。

2. 前史——ソ連期の朗読会

まずは、新生ロシアの朗読会の特徴をより深く理解するために、ペレストロイカ以前の朗読会の歴史を、ソ連と新生ロシアで詩を読み続けた一人の地下詩人の生涯を通じて、振り返ってみたい。

1999年10月7日。一人の詩人が遠い旅路に出た。ゲンリフ・サブギール。1928年にロシア中南部のアルタイ地方に生まれ、60年代初頭から90年代にかけて児童詩人として人気を博し、数々の絵本やアニメーションの脚本、主題歌を創作した。その陰で、風刺と哲学性に満ちた「大人のため」の詩や散文を書きためていたが、それらの作品はソ連国内では1989年まで出版を許されなかった。50年代には、モスクワの非公式文学・芸術グループ「リアノゾヴォ」のメンバーとして、アパートやアトリエの小さな集会で仲間達に作品を朗読していたが、ペレストロイカ前後からは自由な発言の場を得て、地区図書館や文学クラブで作品を朗読する日々を過ごした。サブギールの芸術家仲間だったヴィクトル・ピヴォヴァーロフ（1937年生まれ）は、非公認の朗読会を回想して、「ゲンリフが本を開いて詩を朗読するのは、楽譜を開いて演奏するのに似ていた」、「彼の声抜きにして彼の詩を思い浮かべることはできない」、「彼の詩は声のために、彼自身の声のために書かれている」²と書いているが、そうしたサブギールの朗読は90年代のモスクワであらためて脚光を浴びることになった。

1999年のその日、サブギールは、アンソロジー『無言の詩』のプレゼンテーションで自作を朗読するために、妻ミーラと共にトロリーバスに乗りこんだ。夕暮れ時のモスクワを走るトロリーバスの座席に夫と並んで腰掛けていた妻は、やがて、これまでも幾度と

² Михайловская Т.Г. (сост.) Великий Генрих. Сапгир о Сапгире. М., 2003. С. 324.

なく詩人を苦しめてきた心臓発作が、とうとう彼を連れ去ったのを知る。数年後、夫人は、詩人が晩年を過ごした自宅に筆者を迎えて、こう語った。「その時、私は、もう彼が旅立ってしまったことが分かった。だから、誰にも何も言わずに、彼の体を抱きしめたまま、どこまでもトロリーバスに乗り続けた」と。その日、朗読会場では、聴衆は胸騒ぎを覚えながら、老齢の詩人の到着を夜更けまで待ち続けたという。朗読会に向かう途上で亡くなった詩人は、まさに詩人としての生を全うしたといえるかもしれない。彼が晩年に書き残した詩の一節は、こうした彼の最期を予言していたかのようである。

トロリーバスの行き先は、空だ

ゲンリフ・サブギール「おかしな境界」(1999年)³

サブギールが詩作に携わった半世紀の間に、ロシアにおける詩の朗読会の形式は大きく変化した。1950-80年代初頭のソ連では、国家が公認した詩人達の朗読会が作家会館などで開かれる一方で、サブギールと同じように多くの詩人達が、ひそかに自宅で朗読会を開いていた。そうした仲間内の朗読会には、詩人、芸術家、彼らの友人や、時にはその友人が、人伝いに情報を得て集まってきた。

サブギールとも親交が深く、60-70年代のモスクワで非公認芸術家として活動していたイリヤ・カバコフ(1933年生まれ)は、当時、自分がアパートで仲間達に絵を見せながら自作のアルバムを朗読した時のことを回想して、こう述べている。

……そう、ちょうどホーム・コンサートのように人数も少なく、せいぜい五人から十二人、多くても十五人です。[……] 絵を披露する時の友人同士のうちとけた雰囲気生まれるのも少人数だからこそです。家族のアルバムを見るのとどこか似ていました。わざわざこのコンサートにやってきて、二時間ぐらいアルバムに見入ったり話を聞いたりしてすごそうとしている人々がかもしだす仲間うちの雰囲気そのものがとても重要だったんです。同時にそれは一種独特な瞑想的—精神的な行為でもあったわけです……⁴

カバコフや他の作家達がしばしばノスタルジーを交えて回想するように、作品への深い関心と理解を共有する仲間うちの朗読会は、親密で創造的な雰囲気に満たされていたという。とはいえ、その心地良さは、言うまでもなく、監視に対する恐怖や、作品を公開できない絶望と表裏一体だった。

³ Саггуп Г.В. Складень. М., 2008. С. 638.

⁴ 沼野充義編著『イリヤ・カバコフの芸術』五柳書院、1999年、141頁。

こうした閉塞的な状況は、30年代から80年代前半まで続いたが、50年代末から60年代初頭の短い「雪解け」の時代には、まったく違う規模と形式の朗読会が、社会現象として現れた。1953年のスターリンの死から数年、文化統制が緩み、社会に自由な気風が満ち始めると、それまで沈黙していた人々の心を代弁するかのようになり、詩人達が社会の前面に出て、語り始めたのである。ギターを弾き語りして自作の詩を歌うブラート・オクジャワ（1924-1997）。19歳で処女詩集を出版し、相次いで新刊を発表して文壇を沸かせたエヴゲーニイ・エフトゥシェンコ（1932年生まれ）。宇宙の広がりや力強いリズムで語るアンドレイ・ヴォズネセンスキイ（1933-2010）……。若き詩人たちは、新時代のシンボルとして一世を風靡し、大勢の観客を前に詩を朗読した。オクジャワが1961年11月にレニングラードの労働者芸術宮殿でコンサートを開いた夜には、チケットを入手できなかった群衆が建物を取り囲み、騎馬隊が交通規制をする騒動になった。詩人達が詩を読む場所は、ホールであれ、街角であれ、人々が一体感のうちに言葉に浸り、自由を噛みしめる祝祭的な場に変貌した。

映画監督らは、詩人を時代精神の権化とみなして、その姿をフィルムに焼き付けようとした。新時代の女性の運命を描いたウラジーミル・メニョフ監督の『モスクワは涙を信じない』（1979年）では、ヴォズネセンスキイがマヤコフスキー広場で詩を朗読する場面が、50年代末の首都の活気を象徴している。60年代初頭のモスクワの青春群像を描いたマルレン・フツィエフ監督の『私は20歳』（『イリイチの哨所』、1964年）では、エフトゥシェンコをはじめ実在の詩人達の朗読会の場面が10数分に渡って映し出される。大ホールを埋めつくす大勢の若者が一心に見つめるその先で、詩人達が次々に壇上に現れては、詩を朗読していく……。熱狂に満ちたその会場風景からは、詩が人々の心をつなぐ「マスメディア」だった時代をかいま見ることができる。雪解け期のソ連において、詩はまさに、人々の気持ちを代弁する生きた言葉であり、時代の声だったのである。

短くも明るい「雪解け」の時代は、1964年のブレジネフの第一書記就任と共に終わりを迎えた。失望した詩人達は、それから約20年後に、まったく新しい形で朗読会の復興が起こることを知る由もなかった。

3. 朗読会の再生期——ペレストロイカから1990年代

1980年代、ペレストロイカ。先述のように、ロシアでは文学に社会論的な役割を期待する伝統があったが、ロシア文学者の望月哲男は、こうした文学と社会の直接的な関係は、ペレストロイカ期にもっとも高まったと指摘している。ペレストロイカ期のソ連では、文学もまた改革派と保守派に分類され、文壇の内部に政治的な党派が形成され、作家達の主

張が社会的な影響力を獲得したのである。⁵

しかし、ペレストロイカ末期からソ連崩壊にかけて、文学は政治的、社会的な力を急速に失っていった。文学、芸術にとって、資本主義経済、刺激的な娯楽、新しいライフスタイルが社会の関心事となった新生ロシアを生き抜くことはきわめて難しく、ビジネス化された90年代前半の出版界では、実用書や大衆小説が台頭し、純文学の需要が減少したのである。

だが、こうした状況において、文学は、政治や社会へのコミットという役回りからようやく解放され、新たな展開を始めることになった。ソ連時代の強固な文学システム（作家同盟や権威的な文学誌等から成る、作家の生活を保障すると共に活動を制限していた制度）が崩壊した後の、いわば焼け跡のような遮るものがない空間で、作家達は思い思いのスタイルで文学的な営みに取り組み始めた。こうした新たな文学運動を象徴するのが、朗読会の勃興である。

作家会館や文化宮殿等で開かれていた、ソ連政府公認の詩人達による大規模な朗読会は、80年代後半から90年代初頭のソ連崩壊前後にかけて、にわかにならぬ求心力を失った。⁶ それに代わって文学界に現れたのが、地区図書館等を拠点に小規模な朗読会を企画する新たな組織である。60年代のオクジャワ達の会とは比べものにならないほどささやかな朗読会の主な主人公となったのは、「雪解け」の恩恵を受けなかった「遅れてきた青年」——つまり、80年代まで自分や友人のアパートで非公開の朗読会を開いていた詩人達だった。彼らは、ペレストロイカを経て、公に集うことができる場所をやっと手に入れたわけだが、誰もが口を揃えて語るのには、「図書館での朗読会など、自分たちが生きているあいだには到底望めない奇跡だと思っていた」⁷ ということだ。だからこそ、詩や文学の愛好者にとって、90年前後の朗読会場は、創作の自由を体現する記念碑的な空間となった。

それは、まさに、朗読会の伝統の再生の時期だったといえる。モスクワでは、この時期に多数の朗読会組織が一斉に活動を始めた。その先駆けとなったのが、1986年に、著名なロシア文化研究者ミハイル・エプシュテインと図書館長ソフィヤ・オリノワが、モスクワ郊外アカデミーチェスカヤ地区の第175番公立図書館で始めた文学クラブ「イメージと思索」である。20-30人も座れば満席になってしまうような一室を借りての活動ではあったが、ペレストロイカの賜物であるこのクラブは、国家崩壊前後の混乱期に詩人と聴衆

⁵ 望月哲男「ポストモダンと現代ロシア文学」『ロシア文学の変容』（「スラブ・ユーラシアの変動」領域研究報告輯16）、1996年、61-85頁参照。

⁶ 下記の文献を参照。Кузьмин. Литературная жизнь.

⁷ 1999-2000年にドミートリー・プリゴフ、ゲルマン・ルコムニコフらに行った筆者のインタビューによる。

の拠り所となり、1990年のエプシュテインのアメリカ移住後は、2000年半ばまではオリノワが、それ以降は、詩人で数学者のアンナ・コトワ（1964年生まれ）がクラブを運営し、今に至るまで、週に一度の文学会を開催している。クラブの名前「イメージと思索」は、原語では«Образ и мысль»であり、イニシャルは«ОМ»となる。その響きが、インドの諸宗教の聖音「オーム」と同じであることに着目した設立者達は、「クラブのイニシャルは、インド哲学では、あらゆる霊的存在の統一と相互理解を象徴している。それこそ、私たち皆が目指す理想である」⁸と語っている。クラブの設立趣旨には、「様々な専門家——文学研究者、化学者、哲学者、数学者、社会学者、小説家、詩人——を結びつけ、人々が専門を超えて創造的な交流をするための言語を創り、文化の諸分野を関係づける」⁹とも書かれ、多様性を認める開放的な精神が重視されていたことが分かる。たしかに、オリノワは、モスクワの数ある文学クラブのキュレーターの中でもとりわけ高齢でありながら、若手詩人達の文学運動とも連携し、クラブの活動の幅を広げようと努めてきた。¹⁰

しかし、このクラブの特徴は、むしろ、常連である旧世代の詩人達や聴衆のために、朗読と討論の場を与え続けてきたことにある。会場のテーブルにいつも用意されているサモワールと昔ながらの丸パンが象徴するように、このクラブの雰囲気は、ソ連時代にアパートで開かれていた仲間うちの朗読会を想起させるものだ。だが、こうした家庭的な朗読会が、誰でも入場可能な公立図書館で開かれているのは、新生ロシア独自の文化現象としてきわめて興味深い。

続く1994年には、1963年生まれの若い詩人ルスラン・エリーニンが、都心のチェーホフ図書館を拠点に、文学サロン「21世紀の古典」を創設した。¹¹モスクワの目抜き通りトヴェルスカヤ街から徒歩で数分という立地にあり、50人余が着席できる小ホール、詩人や出版社が少数の詩集や文芸雑誌を持ち込んで自由に販売できるロビー、朗読会の休憩時間に人々が数ルーブル（10数円）の紅茶で体を温めることのできる気安いカフェを併設したこのサロンは、詩に関心はあるが郊外までは足を運ばない文化関係者を広く取り込みながら、人々が詩を共有し、詩をめぐって意見を交わす場として機能してきた。¹²

⁸ Образ и мысль. Литературный клуб [http://lit-obraz.narod.ru/] (2012年8月29日閲覧)

⁹ Там же.

¹⁰ Вавилон. Литературная жизнь Москвы. Заявления редакции. Июнь 2000 г. [http://www.vavilon.ru/lit/appeals.html] (2012年8月29日閲覧)

¹¹ Вавилон. Литературная жизнь Москвы. Салон "Классики XXI века" [http://www.vavilon.ru/lit/office/klassiki.html] (2012年8月29日閲覧)

¹² 穿った見方をすれば、この安価で居心地の良いカフェは、ソ連公認文学の象徴的なトポスであった作家会館の有名なレストラン——特権階級のための高級レストランで、詩人ドミートリー・プリゴフはそれを揶揄する詩を書いた——の対極にあり、カフェ自体が、新しい文学運動の特徴を表現

エリーニン、出版家としても活躍し、ソ連末期の最初の非国営文芸出版社のひとつである「R・エリーニン文学出版社」を創設して、地下文学や現代詩を刊行したことで知られる。エリーニンが、この文学サロンと同名の現代詩集シリーズを企画したことからも分かるように、彼にとって、朗読会は、限られた聴衆が詩を共有する場であるだけでなく、詩がそこから世界に広く発せられるための出発点だった。エリーニンが、1996年に病に倒れた後は、妻で文学者のエレナ・パホーモワ（1968年生まれ）が出版事業とサロンを引き継いだ。エリーニンは、2001年、妻とサロンを遺して、38歳で世を去った。

僕は君より生き急ぐ
 そして君を愛する
 君が彼らより生き急ぐがゆえに¹³

というエリーニンの詩は、まるで、彼の死と、彼の遺志を引き継いで先端的な活動を続ける妻の生とを予言していたかのようなものである。

パホーモワは、世代や流派を超えて詩人や作家を招き、バラエティに富んだプログラムを展開してきた。オクジャワ、ヴォズネセンスキー等の「雪解け」の詩人。宇宙的な世界観をメタファーで表現するコンスタンチン・ケドロフ（1942年生まれ）。サブギール、ドミートリー・プリゴフ（1940-2007）等のソ連時代のアンダーグラウンド詩人。スキャンダラスな小説と映画で知られる作家ウラジーミル・ソローキン（1955年生まれ）。『現代詩の古典』的存在である詩人エヴゲーニー・レイン（1935年生まれ）、アレクサンドル・クシネル（1936年生まれ）。そして多くの若手詩人達……。このサロンで朗読した作家、詩人達のリストは、まさに現代ロシア文学の多様性を映し出すものだ。¹⁴

現在も、サロン「21世紀の古典」は、「現代文学の発展に役立つ共同の文化的空間」（パホーモワ）として、現代美術展を伴う朗読会、新刊書のプレゼンテーション、20世紀詩をめぐるシンポジウムなどのプログラムを毎週企画し、テレビ局と合同で詩の番組を制作し、モスクワ国際詩人ビエンナーレ等の催しに積極的に関わっている。このサロンの特徴は、他のメディアや機関と協力し、社会や文化における文学の影響力を強めようと努めていることにある。筆者は、このサロンでしばしば顔を合わせていた現代演劇の脚本家に舞台上に招かれた際に、脚本に様々な現代詩のフレーズが巧みに引用され、客席の笑いを誘っているのを目の当たりにしたことがあるが、それは、このサロンで朗読された詩が現代文

しているようでもある。

¹³ Арион. 1997. № 2. С. 93-94 に、この詩を含むエリーニンの詩数編が掲載されている。

¹⁴ Пахомова Е.А. Литературный клуб «Классики XXI века» [<http://chehovka.ru/structure/kulturnyj-czentr/literaturnyj-klub-klassiki-xxi-veka.html>] (2012年8月29日閲覧)

化に与えた影響の一例に過ぎない。

一方、1996年には、ソ連時代のアンダーグラウンド芸術家アナトーリー・ズヴェーレフ(1931-1986)を記念して建てられたズヴェーレフ現代美術センターで、詩人ニコライ・バイトフ(1951年生まれ)とスヴェータ・リトヴァク(1959年生まれ)が、文学クラブ「プレミア(プレミエーラ)」を開始した。モスクワ郊外のギャラリーを舞台とするこの文学クラブは、伝統的なスタイルの朗読会に加えて、アートと文学の融合(アーティストブックの展示と朗読等)をテーマにした催しや、リトヴァクを始めとする過激なパフォーマンスのタブを行うことに特徴があるといえる。

また、この時期創設された朗読会の中でも、とりわけ注目に値するのが、歴史的な寺院と文化人墓地で知られるノヴォデーヴィチ修道院脇の第27番図書館で、1996年に始まった文学会「アフトルニク」である。¹⁵ 会を担ったのは、「若き文学者の同盟バビロン」のメンバー達。「バビロン」は、25歳以下の詩人、作家によって1988年に形成された文学グループである。創立したのは、スタニスラフ・リヴォフスキー(1972年生まれ)、ヴァジム・カリーニン(1973年生まれ)などの若い詩人達だったが、なかでも中心的な役割を演じたのが、ドミートリー・クズミン(1968年生まれ)である。クズミンは、文芸誌『バビロン』(1989年から2004年にかけて刊行、92年までは地下出版)の編集長、および出版社「アルゴリスク」の編集長として最前線の文学作品を出版すると同時に、「バビロン」の文学会「アフトルニク」のキュレーターとして、朗読会という伝統的なジャンルに革命を引き起こした。

クズミンが、「モスクワにはすでに多くの朗読会場があったが、いつも同じ詩人が詩を読み、似たりよったりのプログラムになっていた。僕達がアフトルニクを始めたのは、詩人と聴衆が語りあえる創造的な場を作りたかったからだ。それに、今までほとんど詩を朗読してこなかった詩人達を招いて、新しいタイプの文学的場所を作りたかった」と語るように、「アフトルニク」では、様々な新しい文学的実験が行われた。¹⁶ 1996年から97年にかけては、主題、形式、韻律等において共通性のある二人の詩人を招いて、両者が交互に詩を読むというスタイルが試みられた。招かれるのは、つねに、一人は若手詩人、もう一人は上の世代の詩人と決まっていた。そうすることで、会場に緊張感が生まれ、聴衆は個々の詩に深く集中し、広い文学的コンテクストを意識しながら作品を解釈、討論するこ

¹⁵ 会の名称は、一九世紀末の象徴主義詩人インノケンチー・アンネンスキー(1855-1909)の造語「アフトルニク」にちなみ、「作者」と「火曜日」という二つの言葉が掛け合わされている。「アフトルニク」では、毎週火曜に文学会が催された。

¹⁶ Вавилон. Литературная жизнь Москвы. Клуб "Авторник" [<http://www.vavilon.ru/lit/office/avtornik.html>] (2012年8月29日閲覧)

とが可能になった。また、97年から98年にかけて行われた「珍しい客人」プロジェクトでは、モスクワで一度も、あるいはほとんど作品を朗読したことのない、地方の詩人や若手詩人が紹介された。

「アフトルニク」のもう一つの特徴は、先述のように出版家として旺盛な活動を展開するクズミンが、朗読会という閉じた場で発せられた言葉を、文芸誌やインターネットを通じて世界に発信し続けたことにある。クズミンは、1997年にはインターネットのサイト「バビロン」を創設し、無数の朗読会の詳細なレビュー、現代作家の人物事典、現代文学アンソロジーを作成し、結果的に、約15年間にわたるロシアの現代文学の見取り図を作りあげた。

こうした文学会の多くは、毎週決まった曜日に朗読会を催していたが、朗読会ブームに沸いた90年代のモスクワでは、単発的な催しも含めて、一晩のうちに様々な場所で朗読会が開かれることも稀ではなかった。「文学サロン」という言葉が喚起する豪華でハイソサイエティな雰囲気とは裏腹に、朗読会の多くは、閉館後の図書館や美術館の質素な一室を会場とし、予約も料金も必要なく、詩を愛する普通の人々が、着古したセーターやジーンズのまま、ぶらりと仕事帰りに訪れて、詩を共有する場所だった。

現在でも、ソ連崩壊前後に活動を始めた多数の朗読会組織のいくつかは活動を続けている。しかし、モスクワの文学サロンの先駆けとして1989年から朗読会を組織していたワジム・シドゥール美術館は、2001年末頃にはほぼ活動を休止したし、都心の一等地にとり残された廃屋めいた建物の2階で催されていた「ゲオルギエフスキー・クラブ」という禁欲的な雰囲気のある文学会は、ちょうど世紀が変わった年に、6年間の活動を終えることになった。¹⁷ ソ連末期に復活した詩の公開朗読の新しい伝統は、2000年代の訪れと共に、大きく変化しようとしていた。それは、明らかに、一つの時代の終焉だった。

ワジム・シドゥール美術館のケースは、この時期にモスクワのいくつかの朗読会が閉鎖に追い込まれた理由を、端的に示していると思われる。同美術館で文学会を企画していた、彫刻家の息子ミハイル・シドゥールらは、文学会設立の趣旨についてこう語っていた——「私達がここで朗読会を催しているのは、亡きワジム・シドゥールのアトリエの雰囲気を再現するためです。まだブレジネフ時代のことでしたが、彼のアトリエは、詩人、作家、研究者、モスクワのアンダーグラウンド芸術を代表する人々をひきつけた、ユニークな文

¹⁷ 「ゲオルギエフスキー・クラブ」は、ゲオルギエフスキー横丁のモスクワ作家同盟の建物を会場として、1995年11月に活動を始め、2001年10月に解散した。文学誌『新文学展望 (NLO)』の編集者タチヤナ・ミハイロフスカヤがキュレーターを務めた。Сид И., Ермакова И. Литературные клубы и объединения постсоветской России. Энциклопедия Кругосвет [http://www.krugosvet.ru/node/36191?page=0,2] (2012年8月29日閲覧)

化の中心地だったのです」。¹⁸ すなわち、シドゥール美術館での文学会の主眼は、60年代から80年代初頭のソ連非公式芸術家達の世界を、国家崩壊後の新社会の中で再現することにあった。公の場所で不特定多数の聴衆に作品を発表できるようになった自由を喜ぶと同時に、自分達が青春を送った60-70年代のアンダーグラウンド文化の親密な仲間うちの空気を保ちたいという矛盾した願いは、シドゥールだけでなく、少なからぬ詩人や聴衆が共有するものだった。だからこそ、90年代のモスクワの朗読会は、独特の居心地の良さや懐かしさに満ちていたのだろう。クズミンらが「アフトルニク」で打開しようとしたのも、この閉塞的ともいえる状況だった。

筆者は、1999年から2006年にかけて、本稿で取り上げた朗読会場すべてに足繁く通ったが、90年代の詩の朗読会を客観的に見るために十分な時間が過ぎた今、文化史的な視点でこの状況を見れば、次のような結論が導き出される。80年代後半から90年代初頭にロシアで小規模な朗読会が次々に生まれ、2000年代に入る頃にそのいくつかが閉鎖に追いこまれていった10数年の歴史は、ソ連時代の非公認文学の延長と、文学の新しい発信形式の模索とが混在する、移行期特有の文化的現象だったのだと。

当時の朗読会は、多かれ少なかれ、開かれていると同時に閉じた場だった。それらの朗読会は、国家崩壊後の混乱の時代に、詩人と聴衆を育ててきたが、それは必ずしも長く持続する形式ではなかった。民主化以降の慌ただしく、様々な娯楽の溢れる社会で、詩を聞くために郊外の美術館や図書館に足を運ぶ人々は急激に増えるはずもなく、その意味では、地区図書館を会場としていた「アフトルニク」でさえも、閉じられた空間だった（会の精神としてではなく、単に空間的な意味ではあるが）。だからこそ、クズミンはやがて「アフトルニク」を休止し、雑誌『空気』を創刊し、その全内容をインターネットで公開することになる。詩が、「空気」のように、どんな境界も越えて広がっていくことを目指して。

4. 書を捨てず、町に出よう——1990年代末から現在

2000年代初頭に「シドゥール美術館のタベ」、「ゲオルギエフスキー・クラブ」、「技術工科大学のタベ」等の朗読会が閉鎖されたことを受けて、2002年2月、モスクワの主な朗読会のキュレーターを中心に、「クラブの危機——絶望か、それとも探求の始まりか」というラウンドテーブルが開かれた。会場では、現代にふさわしい朗読会の形式が議論されたが、当時、人々が揃って並々ならぬ関心を寄せていたのが、1999年に最初の店舗をオープンした「プロジェクト・オギ」である。

「オギ」は、「総合人文科学出版社」の略称で、哲学書や現代詩ブックレットのシリー

¹⁸ Там же.

ズを始め、良質な人文書を出版する出版社として、90年代に活動を始めた。その「オギ」が、1998年12月に、書店、カフェバー、ステージが合体した都市型の文化空間を、モスクワ中心部のトリョフブルドヌィ横町のアパートの一階に、突如として出現させたのである。ロシアではかつてなかったスタイルのクラブは、瞬く間に話題となり、クラブは、1年後、チーストゥエ・プルディ（清らかな池）地区のポタポフスキー横町の大きな建物に移転した。「プロジェクト・オギ」のステージでは、ジャズのコンサートと並んで、多数の詩の朗読会が企画され、「オギ」は瞬く間に現代詩の中心地となった。

古いモスクワの街並みを残す都心の一角。並木路をはずれ、古い教会の傍らをぬけて、閑静な住宅街にたどりついて、表通りに看板はない。本当にここなのかと不安に思いながら中庭に入り、地下に続く扉を見つけると、天使の絵の描かれた金色の小さな看板が観客に微笑んでいる——。そんなアングラな雰囲気に加えて、朝4時まで開いている、小さいながらも抜群の品揃えを誇る書店、話題のキュレーター、フョードル・ロメルギャラリー、建築家アレクサンドル・ブロツキー（1955年生まれ）が得意とする計算し尽くされた荒削りな内装、充実した文化プログラム、安価で居心地の良いバーの魅力で、クラブは大成功を収め、若者達が押し寄せた。

「プロジェクト・オギ」では、多数の若手詩人に加えて、著名な詩人達がステージに立った。東西の詩の伝統を受け継いだ神話的な詩を読むチュヴァシ出身のゲンナージイ・アイギ（1934-2006）、モスクワ地下文化の代表的詩人レフ・ルビンシュテイン（1947年生まれ）、プリゴフ……。また、小説、人文書、文芸誌の新刊のプレゼンテーションも盛んに行われた。「ロシアのガルシア・マルケス」といわれるマジック・リアリズム小説『チャンジョエの四〇年記』の作者ドミートリー・リップスケーロフ（1964年生まれ）、ユダヤをテーマに油彩やオブジェを制作するアーティストで、詩的回想録を出版したグリーシャ・ブルスキ（1945年生まれ）など、いつもはほとんど朗読会に顔を見せない珍しい作家達も、朗読に招かれた。

「オギ」グループは、2000年には、ブックカフェ「ピロギ」1号店を、2001年にはギャラリーを併設した「ウーリッツァ・オギ」を開き、カフェにおける朗読会というスタイルを定着させた。図書館の一室や閉館後の美術館のような閉じた場所ではなく、都市の新しい文化全般に興味を持つ「普通の」若者が集まる場所で詩の朗読会が開かれたことには、言うまでもなく、画期的な効果があった。ウォッカやビールのグラスを手に、肩肘張らずに詩に耳を傾ける新しい聴衆の層が生まれた。2000年代初頭のモスクワでは、現代詩のブームが起こり、ドミートリー・ヴォデンニコフ（1968年生まれ）のようなスター的な詩人が生まれ、詩人のポートレートが流行雑誌のページを飾った。流行が過ぎ去った後も、現代詩にコアな関心を持ち続ける聴衆と読者が残った（もちろん去っていった者も数多くいたが）。

しかし、「プロジェクト・オギ」の現代詩に対するより重要な貢献は、詩人達に居場所を与えて、交流の場を作ったことにあったといえる。それまで中年の詩人達は、2000年前後にモスクワで急増した気取った喫茶店に入って居心地の悪い思いをするよりは、自宅に友人を招いて、あるいは並木道などを散歩しながら話をするを好んでいたが、彼らも、自分の詩集が並ぶ書店のある「プロジェクト・オギ」では、くつろいだ表情を見せた。若手詩人達は、まるでそこで暮らしているかのように、我が物顔にテーブルを囲んで夜更けまで語り明かし、文学批評家は、閑散とした昼間のバーで記事を書いていた。「プロジェクト・オギ」の創立者の一人であるニコライ・オホーチンは、クラブのスローガンは“Connecting people”であると語り、「今日では、ステージで語られていることが重要なのではなく、隣りに誰がいるかが重要なんだ。周りにいる人々の半数を知っていて、残りの半数とも知り合うことができる。そんな状況が」¹⁹とさえ述べたが、たしかに、このクラブは、90年代末のモスクワで、文学に関わる大勢の人々が昼夜を問わずに自由に集える唯一の場所だった。この空間では、ちょうど、芸術家や作家達が集った20世紀初頭のパリのカフェがそうであったように、様々な新しい「プロジェクト」が生まれた。新しい作品。新しい詩集。そして、ここで育った若い文学者達は、いつか自分の新しい文学クラブを作りたいという夢を抱いた。

だからこそ、「プロジェクト・オギ」の2012年5月の突然の閉店の知らせは、世代を超えて、多くの詩人や客達に衝撃を与えた。閉鎖を知った詩人達は、ブログやLive Journal²⁰で、オギにまつわる回想を次々に発表し、文化雑誌でもそのニュースが取り上げられた。モスクワの著名なフリージャーナル『大都会（ボリショイ・ゴーロト）』（2012年5月22日号）では、「プロジェクト・オギ」閉鎖に際して6人の著名人のインタビューが掲載された。詩人のミハイル・アイゼンベルク（1948年生まれ）は、このクラブのおかげで「モスクワは森のような場所から、隠れ家のような場所になった。とても快適な空間へ」と語り、詩人レフ・ルビンシュテインは、文学バーの先駆けとして「プロジェクト・オギ」を歴史的に評価した。一方、「プロジェクト・オギ」の文学会のキュレーターを8年間務めたユーリー・ツヴェトコフ（1969年生まれ）は、自分がかねがねこのクラブは「博物館」であると語ってきたと述べた——「私達はここに子供達を連れてこなくてはならない。多くの人達がここで育った。ここに来れば、90年代の終わりと2000年代の初めに私達がどんなふうに暮らしていたかが分かる」と。²¹「プロジェクト・オギ」は、まさに20世

¹⁹ Горина М. «О.Г.И.» закрывается. Большой город. 22 Мая 2012 [http://www.bg.ru/news/11024/] (2012年8月29日閲覧)。

²⁰ ロシアでは文化人のソーシャル・ネットワーク利用が盛んであり、現代ロシアの詩壇ではLive Journalのページがしばしば個人編集の文学誌としての性格を担っている。

²¹ Горина М. «О.Г.И.» закрывается // Большой город. 22 Мая 2012.

紀末のロシア文化の象徴であり、その閉鎖もまた、一つの時代の終焉を意味していた。

ルビンシュテインは、「プロジェクト・オギ」の閉鎖の理由はおそらく経済的なものだと書いているが、閉鎖の実際の理由は明らかにされていない。しかし、ニコライ・オホーチンは、閉鎖の3年半前の2008年末にすでに、「プロジェクト・オギ」の「衰退」をめぐるインタビューに答えて、「1998年、2000年、あるいは2002年の状況ですら復活させることは不可能」であり、「オギ」だけでなく現代文化全般が失速しているのだと述べている。そして、「プロジェクト・オギ」で育った詩人や文化運動家が、多くの朗読会組織を新たに運営していることに触れながらも、人々が切実に詩の朗読を求めた90年代末のような時代は過ぎ去ったのだと結論づけている。²²

「プロジェクト・オギ」の閉鎖に寄せたコメントで、多くの人がその「継承者達」に言及したように、現在でもモスクワでは、新しい朗読会や文化人カフェが活動を続けている。「プロジェクト・オギ」の文学会のキュレーターを共に2004年から2012年まで務めたダニエラ・ファイゾフ（1978年生まれ）とユーリー・ツヴェトコフは、2004年1月にプロジェクト「文化的イニシアチブ」を開始し、ブックカフェ「ビリングア」、レストラン「ポクロフカの別荘」等で、盛んに朗読会を開催し、現在のモスクワの詩壇をリードしている。モスクワとペテルブルクに支店を持つレストラン「ジャン・ジャック」²³は、文化人の集う新たな場所として機能している。それらの場所やグループの、文化史的な観点から見た特徴や、現代詩の発展に果たした役割は、4半世紀も経たないうちに明らかになるはずだ。現時点では、「文化的イニシアチブ」が始まり、「若き文学者の同盟バビロン」が解散した2004年が、現代詩をめぐる状況の一つの転換になったことを指摘するにとどめ、「バビロン」の解散について補足的に述べておきたい。

「バビロン」は、2004年3月20日に解散した。15年間の活動に終止符を打つための舞台を、クズミンらはあえて伝統的な文学の場ではなく、伝説的なクラブ「ブンケル」の姉妹店として2001年にオープンした先端的なクラブ「B2」に求めた。そのスタイルは、「プロジェクト・オギ」のアイデアを継承したものでもあった。

若い革命的な詩人の共同体として出発した「バビロン」の創始者たちも、すでに30代。より若い世代の詩人たちと次第に齟齬を来すようになった彼らは、新しい活動形式を求め

²² Бабицкая В. Николай Охотин. Откуда есмь пошел Проект ОГИ // Openspace.ru [http://www.lookatme.ru/my/my/other/61541-nikolay-ohotin-otkuda-esm-poshel-proekt-ogi] (2012年8月29日閲覧)。『ポリシヨイ・ゴロト』は、豊富な文化・社会記事で知られるモスクワの著名なフリーペーパー。フリーペーパーという性格上、バックナンバーを閲覧することは難しく、本稿ではやむをえずインターネットへの転載記事を参照した。

²³ ミーチャ・ボリーソフとドミートリー・ヤンボリスキーが開いたカフェ、レストランの一つ。彼らのプロジェクトによる他のカフェ「アパート44」等も、文化人の集う場として知られる。

て「バビロン」の解散を決意したと語った。当初彼らは、結成からちょうど15周年にあたる2月に解散を予定していたが、3月20日に延期したのは、「次の世代にバトンを渡す」(クズミン)という意味を強めるためだった。翌3月21日は、ユネスコが1999年に定めた「世界詩の日」であり、「バビロン」はその前夜に「詩の表舞台」を明け渡したのである。

筆者もその解散に立ち会ったが、300人以上が押し寄せた会場の熱気は凄まじく、ソ連崩壊後のロシアで「バビロン」と共に現代詩のムーヴメントが着実に育ってきたことを実感する夜だった。「アフトルニク」のスタイルを想起させる、比較的作風の近い30代の詩人と20代の詩人が15組のペアになって自作を朗読する会の進行も、詩は時代を超えて続いていくというメッセージを伝えていた。陶酔的なパフォーマンスで現代詩の読者層を拡げてきたドミートリー・ヴォデンニコフ、マリーナ・ツヴェターエフを思わせる肉感的な言葉で女性の感覚を綴るエヴゲーニヤ・ラヴート(1972年生まれ)、アンドレイ・セン＝センコフ(1968年生まれ)、マーラ・マラーノワ(1970年生まれ)らが、若い詩人たちに「聖火」を手渡した。

そして熱狂の翌日、一瞬の空白も許さないというように、「プロジェクト・オギ」を舞台に、2日間にわたる「世界詩の日フェスティバル」が開かれた。舞台には、ドミートリー・プリゴフやレフ・ルビンシュテイン、セルゲイ・ガンドレフスキー(1952年生まれ)、チムール・キビーロフ(1955年生まれ)という父の世代の詩人達、プソイ・コロレンコ(1967年生まれ)や、昨日若い世代に聖火を手渡した「バビロン」の詩人達、そして聖火を手渡された20代の詩人達が、入れ替わり立ち替わり数編の詩を朗読しては次の詩人に場所を譲った。その祝祭的な光景は、「バビロン」無き後の停滞の予感を吹き飛ばした。しかし、2004年は、「バビロン」の終焉であるだけでなく、この伝説的なクラブが終わりへの道を歩み始めた年だったのかもしれない。若い詩人達は、より若い世代のキュレーター達が完全に独立して活動を行える新たな場を求めている。そしてまた、詩をめぐる状況も緩やかに変わろうとしていた。

とはいえ、どんなにインターネットが普及しようとも、現代詩の社会的なブームが去ろうとも、現在も、そしてこれからも、詩人は様々な場所で詩を朗読することだろう。ソ連時代さながらに、個人のアパートで。図書館、博物館、カフェ、レストラン、書店で。²⁴ 広

²⁴ 本稿では言及しなかったが、「ビブリオ・グロブス」、「ブックベリ」等の多くの書店では、売り場の一隅で詩人や作家の朗読会が催されている。作品を静かに傾聴するのに適した空間とは言えないが、一般の人が朗読会に関心を持ち、「文学が生きている」ことを実感するための場として機能している。なお、本稿で詳しく言及できなかった重要な朗読会組織として、80年代の文学クラブ「ポエジヤ」、イーゴリ・シートが1995年に始めた「クリミア・クラブ」等がある。

場の詩人の銅像の下で。森，線路の脇で（筆者が 2006 年に参加したアンドレイ・ベールイ学会でも，詩人が晩年を過ごしたクチノの森や鉄道脇で詩が朗読されたが，戸外での朗読会は，地方の文学フェスティバル等でも決して珍しくない）。そして時には，「動物のために詩を読みたい」と語った詩人ゲルマン・ルコムニコフ（1962 年生まれ）のように，動物園の檻の傍らで……。

今後も，そうした朗読会の変遷——会の誕生，衰退，再生，形式，キュレーターの役割，プログラムの選択，空間，聴衆，他のメディアとの関わり，フェスティバル——をたどることは，ロシアにおける文学の役割の変化，文学と社会の関係を理解するための視座を与えてくれるはずだ。今夜も，広いロシアのどこかで，詩人の声が響いている。

Русская литература после 1991 — история поэтических вечеров

КОНО Вакана

В данной статье рассматривается история русских, в частности, московских поэтических вечеров после перестройки. В истории русской литературы поэтические вечера отражают важные литературные, культурные и социальные проблемы. Изменение форм, мест и стилей поэтических вечеров интересно совпадают с изменением социальных и культурных ролей поэтов и с новым отношением российского общества к поэзии. В данной статье исследованы несколько этапов «возрождения» традиции поэтических вечеров после перестройки: 1) появление большого количества литературных центров в библиотеках с конца 1980-х по середину 1990-х гг. 2) рождение культурных центров и клубов с конца 1990-х по 2010-е гг. Кроме того, в статье анализируются также новые литературные движения и проекты молодых поэтов, организующих литературные вечера.